

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 2 号 (4 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比(前年比) >
ナシ	黒斑病	<u>多</u>
カキ	カキクダアザミウマ	並
チャ	もち病 チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ	山城：並（並） 丹波：並（並） 丹後：並（並） 山城：並（並） 丹波： <u>やや多</u> （やや多） 丹後： <u>多</u> （多） 山城：やや少（少） 丹波：少（少） 丹後：やや少（やや少） 山城：やや少（少） 丹波： <u>やや多</u> （やや多） 丹後：並（少）
キャベツ	菌核病	<u>やや多</u> （やや多）
アブラナ 科野菜	コナガ アブラムシ類	並（やや少） 並（やや多）

※ 平年とは過去 10 年の平均である。

目次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	6
参考	
Ⅰ 近畿地方の気象の 1 か月予報	8
Ⅱ 用語の定義	8
Ⅲ 予報本文の見方	9

農作物病虫害情報サービス
ホームページ
<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>



QRコード

予報本文

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比多い

予報の根拠

(1) 越冬量は平年比多い(+)。

項目	本年	平年値
罹病枝率(%)	62.4	22.5

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ないと予想されている(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 二十世紀は本病に特異的に弱い品種である。
- (2) 枝病斑やボケ芽(萌芽しない罹病芽)が、春季の第一次伝染源となる。ここで分生子が形成され、風雨によって新葉や幼果に一次伝染する。降雨(少雨)日数が多く、気温が18℃以上になると分生子の形成、飛散が盛んになり、本病が多発しやすくなる。
- (3) 防除としては、①塗布剤による枝病斑の封じ込め、ボケ芽の除去により、春季の第一次伝染源を減らすこと、②果実の発病を抑えるために小袋かけ前の5月上～中旬と、葉での発病が最盛期となる梅雨期に薬剤防除することが重要である。

2 カキ カキクダアザミウマ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

(1) 前年10月には被害の発生を認めていない(平年並)。

項目	令和5年10月	平年値
被害果率(%)	0.0	0.1

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に年1回発生。カキや付近のマツ、スギ、ヒノキ、クヌギなどの樹皮の粗皮の隙間で、成虫で越冬する。
- (2) 4月下旬頃に越冬場所から新芽に移って、展開後2～3日以内の新葉に寄生する。
- (3) 4月中下旬頃から新葉をよく観察し、新葉が出始めた日から1週間以内に防除を行う。

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：山城 平年並(前年並)
丹波 平年並(前年並)
丹後 平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 令和5年10月の発生量は、山城、丹波及び丹後で発生を認めていない(平年並)。

地域	項目	令和5年10月	10月の平年値
山城	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	1.9
	発生ほ場率(%)	0.0	4.5
丹波	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	1.7
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ないと予想されている(+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 越冬芽に付着した胞子が3月下旬頃から発芽し始め、新芽の生育につれて新葉および新梢に感染する。雨が多く、日照が少なく陰になりやすい地理的条件の園のすそ枝等で発生が多くなる。また、窒素肥料の過剰施用により発生が多くなる。
- (2) 前年の秋期に多発した園では注意する。
- (3) 被害が発生した新芽を製茶した場合、品質が著しく低下する。そのため、被害を認めた場合は部分摘採などを行う。
- (4) 防除適期は萌芽～1葉期である。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容	発生量：山城	平年並(前年並)
	丹波	平年比やや多い(前年比やや多い)
	丹後	平年比多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 令和5年10月の発生量は、山城で平年並、丹波で平年比やや多く(+)、丹後で平年比多かった(+)。

地域	項目	令和5年10月	10月の平年値
山城	綴葉数(㎡当たり)	0.3	0.5
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	20.0	14.3
丹波	綴葉数(㎡当たり)	6.4	1.5
	幼虫数(㎡当たり)	0.4	0.4
	発生ほ場率(%)	60.0	36.3
丹後	綴葉数(㎡当たり)	0.5	0.4
	幼虫数(㎡当たり)	0.3	0.0
	発生ほ場率(%)	50.0	5.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、暖かい日は綴り葉から這い出て古葉や新芽を食害する。前年秋に多発した園では注意する。
- (2) 通常、第1回目のふ化期(防除適期)は5月末～6月初めで、4回世代を繰り返す。
- (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害し、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除を心掛ける。
- (4) ジアミド系及びIGR剤などの薬剤の効果が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

3 チャノホソガ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない(前年比少ない)
	丹波	平年比少ない(前年比少ない)
	丹後	例年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 令和5年10月の発生量は、山城で平年比やや少なく(-)、丹波で平年比少なく(-)、丹後で例年比やや少なかった(-)。

地域	項目	令和5年10月	10月の平年(例年)値
山城	寄生芽率(%)	3.9	5.3
	巻葉数(m ² 当たり)	0.1	4.0
	発生ほ場率(%)	10.0	40.6
丹波	寄生芽率(%)	0.8	11.4
	巻葉数(m ² 当たり)	0.4	1.9
	発生ほ場率(%)	40.0	71.7
丹後	寄生芽率(%)	0.0	(6.4)
	巻葉数(m ² 当たり)	0.0	2.3
	発生ほ場率(%)	25.0	53.3

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬後、4月上旬～5月上旬に羽化し、新芽に産卵する。秋整枝をしなかった園や自然仕立て園では発生しやすい。
- (2) ふ化した幼虫は新葉裏面の表皮下に食入し、3齢になると葉縁を巻くようになる。十分発育すると三角巻葉をつくり、その中に糞を蓄積する。気温が高いと発生が早くなる。
- (3) 新芽に卵や皮下潜行を認めたら直ちに防除を行う。
- (4) 巻葉内に堆積した虫糞により製茶品質が低下するので、摘採が遅くなる園では幼虫の発生に十分注意し、摘採近くになって巻葉を生じた場合は速やかに摘採する。

4 カンザワハダニ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない(前年比少ない)
	丹波	平年比やや多い(前年比やや多い)
	丹後	平年並(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査では、発生量は山城で平年比やや少なく(－)、丹波で平年比やや多く(＋)、丹後で発生を認めなかった(平年並)。

地域	項目	本年	平年値	前年値
山城	寄生葉率(%)	0.0	0.9	0.5
	産卵葉率(%)	0.0	0.3	0.4
	発生ほ場率(%)	0.0	22.7	22.7
丹波	寄生葉率(%)	0.7	1.0	1.3
	産卵葉率(%)	0.3	0.1	0.0
	発生ほ場率(%)	33.3	23.3	50.0
丹後	寄生葉率(%)	0.0	1.3	1.0
	産卵葉率(%)	0.0	0.3	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	22.5	50.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ない(－)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が上昇し、暖かい晴れた日が続くと、急速に増殖する。
- (2) 毎年多発する園や秋期に防除しなかった園では、特に注意する。
- (3) 一番茶期の防除はなるべく早く行う。

野菜

1 キャベツ 菌核病

予報内容	発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)
------	----------------------

予報の根拠

- (1) 令和5年11月に発生を認めていない（平年並）。

項目	令和5年11月	平年値
発病株率 (%)	0.0	0.01
発生ほ場率 (%)	0.0	4.2

- (2) 3月中旬の調査では、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率 (%)	0.0	0.0
発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年比多く（+）、日照時間は平年比少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇雨天が続く時に発生しやすい。
 (2) 発生終期に形成された菌核は土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存可能である。
 (3) 発病株は菌核を形成する前に抜き取り、土中に深く埋めるなど処分する。

2 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 3月中旬現在、キャベツでの発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数（頭/10株）	0.0	0.03
	寄生株率 (%)	0.0	0.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温、乾燥が続くと発生が多くなりやすく、雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
 (2) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

3 アブラナ科野菜 アブラムシ類

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 3月中旬現在、キャベツでの発生を認めていない（平年比やや少ない）。

項目	本年	平年値
寄生株率 (%)	0.0	2.4
発生ほ場率 (%)	0.0	29.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
 (2) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
 (3) 野菜等をは種又は定植する際には、シルバーフィルムやムシコン等のマルチを被覆するか、シルバーテープを張り、有翅虫の飛来を防止する。また、早期発見によりアブラムシ類の防除に努める。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp.7を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について、発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾプス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに薬剤防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い、塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、籾がらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

4 種子消毒について

- (1) 温湯消毒を行う場合は必ず乾籾を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また、各温湯消毒器の使用上の注意事項を遵守する。

5 スクミリングガイ

- (1) スクミリングガイは在来のタニシ類などに比べて貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕うんにより機械的に貝を破碎し密度を低下させることができる。水田の土が硬くなる水稻収穫後の耕耘が最も殺貝効果が高い。また、土中に潜って越冬するが、その深さは6cm未満が大部分なので、耕うん深度は浅くてよいが、できるだけ土の硬い時期にピッチを小さくして（通常の1/2以下の作業速度が望ましい）いっきに耕うんすると殺貝効果が高くなる。さらに、越冬場所をなくすため、水路の泥上げを地域全体で行うと効果的である。
- (2) 苗を移植する前に、田面を細かく耕うんし、越冬した大きな貝を殺す。
- (3) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。
- (4) 耕うんや代掻きの時に農業機械がほ場間を移動する場合には、泥とともに機械に付着した貝を移動させないように、都度洗浄を行う。
- (5) 貝が水稻に被害を及ぼすのは田植え後、約3週間までで、その間、水深を出来るだけ浅く保つ。水深1cmが理想だが、4cm以下に保つと実害が出にくい（貝は水中でのみ接触する生態のため）。
- (6) 圃場の均平が重要である。圃場が凸凹だと深いところの株が食害され、一方、土が水から長時間露出すると除草剤の効き目が劣ってくる。田植え前に圃場の高低を修正するとともに、被害が生じやすい田植え直後は極く浅水とし（一部の土が水面上に出ても）、徐々に水深を増加させるなどの工夫が必要。
- (7) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

詳細は、令和3年4月2日付け「防除所ニュース令和3年第3号」を参照のこと。

ムギ

1 赤かび病

- (1) 1回目の防除適期は、二条大麦では葯殻の抽出期(写真 a、出穂期の14～16日後)、小麦では開花始め(写真 b)から(出穂期の4～5日後)から開花期とされ、2回目の防除適期は1回目の防除の1週間後とされている。特に、この時期に赤かび病菌の子のう胞子の形成と飛散を促す気象条件(日最高気温が15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後)が重なると、赤かび病に感染するリスクが高くなる。
- (2) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、出穂前にほ場の排水を良くする。
- (3) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。

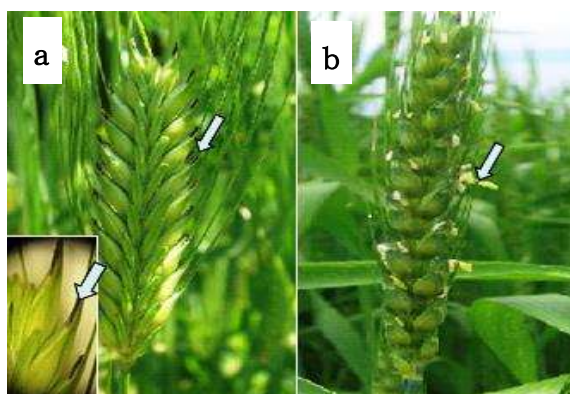


写真 ムギ赤かび病の防除適期(1回目の目安)

a : 二条大麦の葯殻の抽出(矢印、左下は拡大写真)

b : 小麦の開花(矢印)

2 コムギ黄斑病

- (1) 小麦推奨品種の「せときらら」は本病に弱く、多発すると下葉から枯れ上がる。発生初期に防除を行うか、感染源となる残渣を分解するため水稲との輪作を行う。

野菜

1 野菜苗の害虫類

- (1) 苗の定植に当たっては、害虫が寄生していないことを確認する。なお、アブラムシ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類など微小な虫は見逃しやすく、ウイルス病を媒介する虫種もあるので注意する。

令和5年度にはキュウリにおいて、アブラムシ類が媒介するとされる「Cucurbit aphid-borne yellows virus : CABYV」及びタバココナジラミが媒介する「ウリ類退緑黄化ウイルス」が府内で初めて確認されたので注意する。

詳細は、令和6年2月1日付「発生予察特殊報第1号」および令和5年12月26日付「発生予察特殊報第2号」参照のこと。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_01.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2023_02.pdf

参 考

I 近畿地方 1か月予報

(3月23日から4月22日までの天候見通し)

令和6年3月21日
気象庁 発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下の通りです。

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ない見込みです。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10	20	70
降 水 量	20	30	50
日 照 時 間	50	30	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年比多く、日照時間は平年比少ないと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比 やや多い（前年比 やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－